

「Y日記」から見たサンパウロ州の日系農業 小生産者の生産と生活(4)プルデンテ市近傍 の日系農業小生産者の2次的集団地「ミネの ムラ」の社会経済的性格

西川, 大二郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

94

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

91

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004598>

「Y 日記」から見たサンパウロ州の日系農業 小生産者の生産と生活 (4)

—ブルデンテ市近傍の日系農業小生産者の
二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格—

西 川 大二郎

目 次

- I. まえがき—問題の所在—
- II. 「ミネのムラ」の経済的性格の概略
 - (1) 日系農業小生産者集団地の形成
 - (2) 「ムラ」の人口構成
 - (3) 「ムラ」の構成員の土地所有規模と農業経営類型
- III. 「Y 日記」から見た日系農業小生産者の生産と生活の様態
 - (1) Y 氏の生活史
 - (2) 「Y 日記」の小さな解説
 - (3) 「Y 日記」記入費目の吟味
 - (4) 「Y 日記」の分析のための費目の分類
 - (5) 全費目についての分類, 整理の結果
 - (6) 農業生産について
 - (7) 家計支出について
- IV. 「ミネのムラ」の生活様式と社会経済的特性
 - (1) 構成員の出身地
 - (2) 婚姻関係
 - (3) 雇用関係に見られる人種, 民族問題
 - (4) 「日本語」学校教育 (以上前号)
 - (5) 宗教生活 (本 号)
 - (6) 文化生活 (以下次号)
 - (7) 社会集団の特性
 - (8) 生活 圏
- V. 結 び

承 前

IV. 「ミネのムラ」の生活様式と社会経済的特性

(5) 宗教生活

① 宗教的支出について

まず、「Y日記」からY家の宗教的支出の内容と年次の推移を知るために、墓参、法事等の記録を年次順に拾い上げて連記してみよう。

昭和20年 1月8日	仏事買物 (含プルデンテ行自動車 墓地行自動車)	1,661 クルゼイロ 360 クルゼイロ
昭和20年 1月15日	仏事ガラナ1袋	170 クルゼイロ
1月23日	仏事菓子代 天皇陛下御真影	100 クルゼイロ 20 クルゼイロ
2月5日	プルデンテ買物行 墓地行自動車 御経代 弘法大師掛軸代	30 クルゼイロ 50 クルゼイロ 40 クルゼイロ
4月19日	マルチノポリス行 O氏仏事御仏前	70 クルゼイロ
4月24日	マルチノポリス行 O氏仏事	205 クルゼイロ
10月31日	花輪2個 線香・ロウソク3個 墓番渡し	80 クルゼイロ 60 クルゼイロ 5 クルゼイロ
11月2日	プルデンテ墓参り	870 クルゼイロ
昭和21年10月5日	碑入金石屋相渡し 亡地願記(ママ)(祈り)代	2,000 クルゼイロ 100 クルゼイロ
11月2日	盆 プルデンテ市墓参り	595 クルゼイロ
昭和22年 2月1日	SS氏墓碑代支払	2,500 クルゼイロ
11月1日	プルデンテ墓参り お盆買物使金	850 クルゼイロ

昭和23年 9月18日	TS 死亡 プルデンテ行 棺一式	500	クルゼイロ
11月 1日	プルデンテ行盆買物使金 (知人盆花輪料3点)	128	クルゼイロ
(筆者註: この年は、子供や父の病気のため墓参なし)			
昭和24年 3月21日	弘法大師 菓子1キロ	15	クルゼイロ
11月 2日	盆日墓参りプルデンテとアニューマス	520	クルゼイロ
昭和25年 3月21日	弘法大師 上仏	20	クルゼイロ
11月 2日	プルデンテ墓参りアニューマス墓参り	350	クルゼイロ
昭和26年 9月30日	弘法大師サンパウロ市寄付金出	200	クルゼイロ
11月 2日	アニューマス盆墓参り (含 芸能見 入場券5人分 300クルゼイロ)	1,000	クルゼイロ
昭和27年 4月25日	マシャード弘法大師寄付	100	クルゼイロ
7月11日	プルデンテ東本願寺より大谷裏方様 観辺費出	300	クルゼイロ
8月21日	T 宅天理教会上金	50	クルゼイロ
9月21日	寺晩餐会	100	クルゼイロ
9月22日	寺寄付金	1,500	クルゼイロ
9月26日	東本願寺御法要おこぞり? 2人分	200	クルゼイロ
9月27日	東本願寺御供養代	300	クルゼイロ
9月28日	本願寺と共に仏教会(記念写真代等)	118	クルゼイロ
10月 4日	プルデンテ行 大谷法主並びに御裏方様	80	クルゼイロ
11月 1日	アニューマス墓参り 盆	250	クルゼイロ
12月 1日	サンパウロ市西本願寺3人分寄付 リッファ	150	クルゼイロ
昭和28年 1月27日	天理教会上	10	クルゼイロ
11月 1日	盆墓参りアニューマス(兄一家) 盆墓参りプルデンテ(弟一家)	1,200	クルゼイロ
12月20日	プルデンテ市本願寺来る。父御寺御 布施	100	クルゼイロ
昭和29年 2月17日	プルデンテ市本願寺公師(ママ)御布施料 自動車賃2人分払い 御賽銭上	50 20 3	クルゼイロ クルゼイロ クルゼイロ

2月18日	プルデンテ市本願寺参り 自動車賃	15	クルゼイロ
4月18日	プルデンテ市真宗本願寺参り 御布施上野袖子公史 ^(ママ) 御布施	100	クルゼイロ
	自動車賃払	20	クルゼイロ
4月19日	寺参りプルデンテ市 御布施上 御教本払い	20	クルゼイロ
5月11日	U女史御布施出	50	クルゼイロ
5月13日	アルバレス弘法大師寄付金	150	クルゼイロ
7月13日	プルデンテ市本願寺寄附金	1,500	クルゼイロ
7月16日	御光師 ^(ママ) 晩餐会出1人 前払	100	クルゼイロ
7月15日	プルデンテ市本願寺御法要出2人分	100	クルゼイロ
7月17日	本願寺より仏様御受料 サンパウロ観世音様寄付出	200	クルゼイロ
		500	クルゼイロ
10月9日	プルデンテ本願寺賞品	200	クルゼイロ
10月10日	プルデンテ本願寺上棟式 相撲者寄附金出 贈りカンジン元出 相撲者花出 供花 相撲者花出	200	クルゼイロ
		100	クルゼイロ
		50	クルゼイロ
		30	クルゼイロ
		30	クルゼイロ
11月1日	盆 ベンセブラ ^(ママ) 墓参り ベンセブラ ^(ママ) 墓参り アニューマス墓参り御墓塗り代 自動車代5人分払	300	クルゼイロ
		50	クルゼイロ
		100	クルゼイロ
		60	クルゼイロ
11月2日	父プルデンテ御墓参り使金線香蠟燭代 自動車代5人分払い	16	クルゼイロ
		32	クルゼイロ
昭和30年1月12日	サンパウロ観世音佛上	300	クルゼイロ
3月20日	父プルデンテ本願寺行 仏教会女子寄付金	100	クルゼイロ

	本願寺仏教教会会費	100	クルゼイロ
3月24日	プルデンテ本願寺行 本願寺御布施上	100	クルゼイロ
3月27日	天理教会神上	5	クルゼイロ
4月8日	プルデンテ本願寺参り佛上2人分	20	クルゼイロ
4月9日	仏教女子青年会寄附金	100	クルゼイロ
4月23日	本願寺結婚式御祝儀出	100	クルゼイロ
6月20日	プルデンテ 寺御布施出	50	クルゼイロ
7月16日	本願寺興業 ^(ママ) 相撲花	200	クルゼイロ
7月17日	プルデンテ寺行 相撲御花(9件) ♪	220	クルゼイロ
7月25日~8月中旬	サンパウロ市行		
	本派本願寺佛様上	30	クルゼイロ
	上観世音参り	30	クルゼイロ
9月14日	プルデンテ行 本願寺寄付	1,500	クルゼイロ
9月25日	御ヒガシ ^(ママ) 寺参りプルデンテ市		
	本願寺行	50	クルゼイロ
	寺御布施料		
	敬老会 寸志	200	クルゼイロ
	仏教青年会花	100	クルゼイロ
	2人自動車賃	20	クルゼイロ
9月28日	御布施 日本よりの派遣僧上出	100	クルゼイロ
10月15日	プルデンテ行 父払本願寺敬老会写真代	50	クルゼイロ
11月1日	アニューマス盆墓参り	♪ 1,050	クルゼイロ
	プルデンテ墓参り	♪ 170	クルゼイロ
11月3日	プルデンテ墓参り	♪ 150	クルゼイロ
11月17日	プルデンテ市 本願寺僧御布施出	200	クルゼイロ
11月27日	プルデンテ本願寺行		
	御布施出	50	クルゼイロ
	佛上(さい銭)	2	クルゼイロ
12月3日	靖国神社出	50	クルゼイロ
12月23日	プルデンテ市買物行		
	本願寺御布施出	50	クルゼイロ
			以上

② 「墓参り」について

上記の記録から知れることが、いくつかある。

まず「墓参り」が、極めて確実に行われていることである。支出の記録ということからすると、それは10月31日から11月2日の間に行われている。

ブラジルで最も広く行きわたっているカトリックの習俗によれば、11月2日が「フィナードの日 (Dia de Finados)」といわれ、フィナードつまり死者・故人に親しかった人々が故人の追憶に捧げる日 (consagrado memória dos mortos) とされ、家族・友人・知人が墓参りする。Y氏はカトリック教徒ではなく、後に述べるように、むしろ真摯な仏教徒であるが、この「Y日記」の記録で知れるかぎりでは、「フィナードの日」の「墓参」をほとんど欠かしたことがない。しかも記録には、日本の祖霊供養の日に擬してこの日を「盆」と記載している。盆は正式には「盂蘭盆会」であり、祖霊供養の法会として、日本に広く定着している日本仏教の宗教的行事である。そしてそれは日本では7月15日を中心に、または月遅れと称して8月15日を中心に行われているが、現在「旧盆」と呼ぶ陰暦7月15日を中心に行われるものが本来のものである。もし、日本の行事がブラジルに持ち込まれているとすれば、7月ないし8月に何らかの祖霊供養の行事が行われていると予想されるが、「Y日記」を見るかぎり7・8月の行事は消え、フィナードの日が明らかに「盆」に代替されている。

ところで「Y日記」が記録されている昭和20(1945)年～昭和30(1955)年の期間には、Y氏は、近い親族に故人をもってはいない。墓参はマルチノポリスとアニューマスとプルデンテの都市または町の公設墓地について行われている。これらの土地は、すでに述べたように、Y氏がこれまで入植・開拓で歩んできたところである。マルチノポリスは1930年から35年までの間コーヒー樹のフォルマドールとして働いたところであり、アニューマスは、1935年から独立自営農として、1947年にこの「ミネのムラ」に来るまで、綿作とハッカ作りにいそしんだところである。その間に作られた人間関係が、この墓参の前提にある。特にアニューマスには、Y氏の夫人の実家がある。プルデンテの墓地には「昭和拾九年拾貳月廿一日SS氏死亡、プルデンテ墓地番号五千九百〇三番地」と日記にも記載され、その後の葬儀・墓地の準備・建設までを遺族に任せられたアミーゴと呼ばれるほどの友人の墓がある。したがって、この墓参は祖霊供養という日本における仏教行事の「盆」よりは幅広く友人・

知人までも含めた内容を持ち、内容においては幾分異なっている。

このような転移・変容が如何にして行われたかは、興味あるところである。そこでまず Y 氏の日本の出身母村における祖霊供養について知ったことを述べよう。

③ Y 氏の出身母村における祖霊供養について

Y 氏の出身母村は、先にも述べたように、現在の福岡県田主丸町の 1 集落である。この町及びその周辺での聞き取りによれば、この地域の「盆」ないし「先祖祭り」は次のようなものであった。

「盆」の行事は、近隣の池尻村の阿弥陀寺（天台宗）では、町方は、8 月 13 日に精霊を迎え、16 日に精霊を送り、または雲雀川で精霊流しをする。村方は、8 月 15 日の夕方、精霊送りという意味で墓参りをする。初盆では、提灯を一つ持って行って、蠟燭がなくなるまで下げて置く。今は、真宗関係が多く見られることであるが、納骨堂に参拝するだけになった。近隣の大分県日田市では、盆は新暦の 8 月 13 日から 15 日に行う。このことから、この地域ではおおむね新暦のいわゆる月遅れに「盆」の行事が行われていることが推察される。

田主丸町での「先祖祭り」は「むら」集落の名姓ごとにやる。それについての墓参の時期は、新暦の 4 月 10 日から 15 日の間である。Y 家の先祖祭りは 4 月 15 日である。その頃は、春の桜の時期にあたる。「むら」集落の家は、Y、T、I、N 等の名姓に分かれ、名姓ごとに、つまり同姓の家の者が、家の墓とは別に先祖墓を持つ。Y 家の先祖墓には「黒田周道」と刻まれている。I 家のものは 250 年前のものという。

「先祖祭り」の墓参にあたっては、当番の家で豆や煮しめを作り、女の人が寄って話し合いながら食事をする。姓によっては（H 家の場合）男が寄って酒を飲む。かつては、先祖祭りには皆が集まった。しかし、今では、代表 3 人が茶を上げて、寺で法要（供養）するというように簡略化された。

各「むら」集落には寺がある。そして、麦生では、入徳寺が 10 名くらいの門徒を持ち、常行寺（真宗）が 50 戸くらいの門徒を持ち、麦生の隣の竹野は麦生の分かれであるが、その西名寺には Y 姓の家が 5~6 軒属しているというように、各寺は各々門徒を持っている。いわゆる寺檀関係が見られる。

これらの事実を見ると、「墓参り」の日は、本来の「盆」が行われる 7~8 月

はなく、また Y 氏の母村の「先祖祭り」が行われる 4 月を離れて、ブラジルのカトリックの習俗である 11 月 2 日の「フィナードの日」に転移、変容したことは明らかであろう。

④ ブラジルと日本の「墓参り」の意味づけ

まずカトリック教徒にとっての墓の意味を考える。

墓の意味付けはもちろん死生観と関わりを持つ。しかし、筆者はここでキリスト教の神義論を厳密に論ずるだけの知識を持ち合わせていないし、またその必要はないだろう。ただし、少なくとも次のことだけは言えるだろう。世俗の一般的キリスト教信者は「死後、死者の魂は神に召されて天国に生まれ変わる」と信じている。そこに至るまでの間の神の審判についての見解はさまざまあるとしても、如何なる審判を受けるかは個人と神との関係の中のことである。周辺の血縁者や、ましていわんや知人・友人の関わることではない。魂が天国に至るまでの過程についての考え方は、多分、葬送・葬儀の場面に反映されるだろう。筆者は、ブラジル滞在中に、カトリックの葬送・葬儀の場に参加し、またある時は、カトリック教徒であるドイツ系ブラジル人の葬儀に際して、遺体を墓地に埋葬する場に知人として立ち会うことになった経験を持っている。ブラジルのカトリック教徒は、基本的に土葬である。死者儀礼の場面では、エンバーミング *embalming*, *embalsamamento* の風習として知られているように遺体に化粧を施し、またそれを盛装し、あたかも生きているようにして葬儀を行い、また埋葬する。遺体が土にかえるだけの時間がたった後、再埋葬するという。墓石は盛大に飾り立て、故人の生前の写真やリリーフを埋め込み、また賛辞を刻む。

「フィナードの日」は、ブラジル語の辞典の解説では “*Consagrado à memória dos mortos*” とある (“*Novo Dicionário da Língua Portuguesa*, Aurélio Buarque, 1971, Rio de Janeiro.)。consagrar には [祝聖する・奉獻する] という意味があるから、解説はどちらかというところ「故人の生前の人柄・業績を讃え偲ぶ」ことを意味する。墓は遺骨を納める場所というより「死者の生前の姿、すなわち肉体を記念し追憶するための場所」(山折哲雄『仏教とは何か』中公新書, 1993 年, 173 ページ)として機能する。つまり、「フィナードの日」の墓参りには、日本の墓参りのような神道の鎮魂・仏教的供養の意味は少ない。したがって、日系人も墓参りに際しては、一般のブラジル人の

ように花で墓を飾ることはあっても、墓前において読経といった目立った墓供養などの行事は慎み、日常的供養は「墓参り」とは別に各家で行われた。ブラジルでこういう話を聞いた。YM（田主丸町の出身）、嫁 T 子、読経を頼んでも寺がないので、自分で経をおぼえたという。

それに対して、仏教と儒教と神道が複雑に習合し、それに個々の民間習俗がかかわる日本の文化における墓の意味について考えてみよう。とはいうものの、筆者の勉強不足もあって、墓の意味についての個別の民俗学的研究のなから普遍的な結論を出すことは、現状においては困難である。宗教学のほうは、個々の教義について論じたものは多いが、それと民間の庶民の生活感としての宗教意識とは必ずしも結びつかない。しかし、最近、1987年から3年間にわたって行われた「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」（略称「東アジア比較研究」）の中で、「儒教文化圏の歴史と社会」班に属して参加し、班の責任者を勤めた加地伸行教授が『儒教とは何か』（中公新書、初版、1990年）という一書を物されている。また、同じ出版社から同じような企画で、山折哲雄『仏教とは何か』（中公新書、1993年）が刊行されている。この両者は、筆者の読後感として言えば、宗教の教義の説明に止まらず、それと庶民の生活感としての宗教意識、また宗教と民間習俗との関係を解き明かしてくれた見事な啓蒙書とはいえる。

この二書を中心にして、墓の意味づけを、私なりに読み取って、誤解を恐れずに整理してみると、次のようにならうか。

まず、仏教はこの世を苦しみの世界とする。「生・老・病・死」である。肉体の死とともに、靈魂は浮遊する。肉体は抜け殻であるから、荼毘に付す。仏教の本来の立場に立てば、お骨、また遺体には意味などはなく、山にでも川にでも捨てるべきものであり、本来は「墓」を作ることはない。靈魂は「中陰」に浮遊し、「因果応報」の原理にしたがって「輪廻転生」する。「中陰」の間、靈魂が次の世で少しでも良い所に「転生」できるように、僧を通じて「供養」する。ブッダの開いた仏教教義の中心には「無」と言う思想があるが、それは永遠に続く「輪廻転生」からの「解脱」を意味している。

それに対して、儒教は、この世を楽しい所と考えた東アジア・中国人の感覚の上に成立していると考ええる。「苦」の世界でなく「楽」の世界である。「いくら現世の快樂をつくそうとも、いずれ必ず死が訪れる。現世こそ最高とする中国人にとって、これは大変つらいことである。インド人やキリスト教徒のよう

に来世や天国を信ずることができるものにとっては、この世は仮の世に過ぎないから、死もまたその過程の一つに過ぎない。神仏の思し召しと思えば、死の不安も恐怖もない。しかし、現実のこの世しかないと考える中国人にとって、死は大変な恐怖である。とすればその死を恐くないものとして何とか納得できるように説明してほしい、と中国人が願うのは当然である。その説明を成功したのが儒教なのである」という。

その説明の根幹には招魂儀礼という、呪術的観念のなかの再生理論がある。つまり、「生者は魂（精神の主宰者）と魄（肉体の主宰者）が一致した状態である。」とする。そして「肉体の呼吸停止が始まると、一致していた魂と魄とが分離し、魂は天上に、魄は地下へと行く。これが死である。」とする。理論的に言えば、「逆に、分離した魂と魄とを呼びもどし、一致させると〈生の状態〉になる。」その儀礼が招魂儀礼である。魂をどこに呼びもどすかという点、それは頭骸骨であり、遺骨であり、帰り来る場所としての形代カクシロであり、その後それは木の板となり、神主シンシュあるいは木主ボクシュと呼ばれ、中国人はこれを死者になぞらえて祭る。「この神主が仏教に取り入れられて位牌となった。」という。

招魂儀礼とは、祖先崇拜そして祖霊信仰を根核とする。というのは、まず「祖先の祭祀＝招魂儀礼をするのは子孫である現在の当主であり、この当主もいずれは死んで祖霊となるとすれば、祖先の祭祀を続けてくれる一族が必要となる。そこで祖先の祭祀・父母への敬愛・子孫を生むこと、それらの三行為をひっくるめて〈孝〉という規範とした。」つまり、「孝を行うことによって、子孫を生み、祖先・祖霊を再生せしめ、自己もまたいつの日か死を迎えるのではあるけれども、子孫・一族の祭祀によってこの世に再生することが可能になる。」さらにいえば、「自己の生命とは、実は父の生命であり、祖父の生命であり、さらに、実は遠くの祖先の生命ということになり、」……それと対照的に、子孫に対して、「自己は個体としては死ぬとしても、肉体の死後も子孫の生命との連続において生き続けることができることになる。つまり、孝の行いを通じて、自己の生命が永遠であることの可能性に触れうるのである。そう考えれば、死の恐怖も不安も解消できるではないか。永遠の生命—これこそ現世の快樂を肯定する現実的感覚の中国人の最も望むものであった。」という。

仏教思想の中には本来、墓を建てる考えはない。仏教の基層のヒンドゥー教や、またイスラム教の世界にも墓はない。山折氏の説では、「ブッダは、遺骨の供養（崇拜）にかかずらうな、と言っているのに、ブッダの遺体は火葬に付

され、遺骨は八つに分けられ、遺骨はストゥーバ（塔）に安置され、遺骨＝仏舎利に対する供養が始まったと言う。それは、弟子の裏切りによるものであり、逆説的にいえば、そのことによって仏教が始まった。」という。しかし、加治氏の説によれば、「無」の思想の仏教は、中国に入って現世的思想の儒教と微妙に習合した。そして、仏教が、東アジアの土着的祖先崇拜の思想を受け入れたことが、また、遺骨供養・遺骨信仰・位牌・墓信仰・墓供養等、儒教的儀礼の形式の多くを取り入れて、習合したことが、仏教の普及の大きな要素であったという。

少なくとも、日本に伝播した仏教は、このような習合を経たものであった。そして、それがまた日本の土着的神道の思想と習俗との間で習合を遂げた。

山折氏の著書の中で、「四章 日本仏教の個性」は、本稿を書くにあたっての大きな参考となった。特に尾藤正英「日本における国民的宗教の成立」を紹介しながら近世仏教の国民宗教化について論じた部分である。

第一に、日本における伝統的宗教は神道と仏教、それに民俗宗教を加えた三者が相互に影響しあって発展した。それが「一つの宗教」「国民的宗教」になって、民衆の間に普及・定着したのが、十五・六世紀のことであった。（註：儒教と仏教との関係は、すでに述べたので、ここでは述べない。）

第二に、「国民化」の実情についてである。仏教について言えば、一般に死者は仏式によって葬られ、供養を受けるが、死者をめぐる仏教儀礼は、その死者の属する「家」と、その家を保護者（檀那）とする菩提寺の関係（寺檀関係）に支えられていた。そのうえ、死者を葬った「墓」ないし「墓地」まで、その菩提寺に付属していた。神道の側で言えば、「集団としての地域社会」と密着して発展したのが神社を中心とする神信仰であった。庶民もそれぞれの村や町で地縁的結合の中心をなす神社をもっていた。そしてこれらの神社は、地域社会に住む人々の共通の氏神であると同時に祖先神でもあった。

第三に、「家」一般の形成という問題である。仏教信仰が主として個人としての死者に深く関係していたのに対して、神信仰は家結合としての地域社会にかかわっていた。

そしてこのような個人・家レベルにおける平等性や普遍性の意識を醸成する上で重要な役割を果たしたのが、民俗宗教であり、死者儀礼や地域の祭礼・行事を、長い時間をかけて育てた文化的母体がそれであったという。

さらに、武田聴州「近世社会と仏教」、岩波講座『日本の歴史』九、によれ

ば、日本の寺院のほとんどは十六～十七世紀の二百年間に創設されたものだという。この時期に創設された寺院には二つのタイプがあって、一つは地域の有力者（領主や武士的農民）が、その家の先祖祭祀のために屋敷内に設けた持仏堂、もう一つは、地域の住民が宗教的な集会を行うためにつくった惣堂である。その二つの「堂」にそれぞれ僧侶が定住するようになった時「寺」が誕生した。僧侶の所属宗派によって寺の宗派が決まり、その宗派の本山の末寺となることで「本末関係」が結ばれた。この寺は、葬式を司る菩提寺として機能し、死者の墓を併設するようになっていった。尾藤氏のいう「国民的宗教」のレベルで言えば、寺の創設がすなわち墓の成立を意味していたのである。こうして先祖の供養がいわば普遍的な形で民間に定着することになった。このような墓システムの浸透こそが日本仏教の変容を示すシンボルであり、また、その物的基盤ともなった。

以上が、システムとしての日本仏教の特質だとすれば、それがブラジルに伝えられた場合、そこにおいて、仏教は如何に定着し、機能するであろうか。

⑤ 本願寺の進出とプルデンテ地域の日系人社会

昭和 27 (1952) 年に東本願寺派の人の来伯が行われ、急に日本からの人の往来がにぎやかになったことは、「Y 日記」にもはっきりと現れている。

昭和 17 (1942) 年、日本とブラジルとの国交断絶状態が始まって、その年の 7 月大使以下在外公館員が日本に引き揚げ、わずかに日本人權益部がサンパウロのスペイン総領事館内に設置され、日本移民は母国日本との関係を断たれ、その限りで日系人社会は閉塞状況に置かれた。昭和 27 年は、4 月 28 日に対日平和条約が発効し、リオに大使館が、サンパウロに総領事館が再び開設されるなど、ブラジルの日系人社会が、第二次世界大戦中の敵国人としての閉塞状況から開放された年であり、同時に日本との多面的な関係が復活し出した年である。

8 月には東本願寺法主大谷光暢および裏方智子のブラジル巡^{ジュンシヤウ}錫が行われた。そのことは、個人の記録である「Y 日記」にも明らかに反映している。しかし、「Y 日記」の家計支出簿的性格からして当然のことであるが、その内容は支出金額によって表され、そこから直接に本願寺に対する心的関係を読み取ることは難しい。ただはっきりしていることは、法主夫妻の巡錫に際しての費用に対し多額の分担金を支払い、また寺への直接の寄付金といった支出が増

大し、その結果それまでと違った宗教関係支出が増大したことである。また、この支出に当たって、支出の主体が、戸主の YS 氏というよりも、YS 氏の父にあたる元戸主の YK 氏であることも注目される。

Y 氏はすでに述べたように、母国の母村においては真宗系の門徒であった。したがって、本願寺法主夫妻のブラジル巡錫に対して、激しい共鳴を示したことは推測に難くない。ただし、そのような本願寺に対する心的共鳴を示した主体は、主に比較的高齢の一世の世代の日系人であったことは注目してよいだろう。本願寺側は、このような日系人一世の心的状況の上にならば、日本におけると同じような寺檀関係をブラジルに復活・構築させる意図を持っていた。昭和 29 (1954) 年に、当地の日系人の寄進によって、新たにプルデンテ市本願寺堂宇の建築が行われたことは、日記の中にも明らかである。

しかし、日本における菩提寺と檀那との寺檀関係は、菩提寺の所有する墓地とそこに立てられた墓を媒介にし、他方檀那側の伝統的遺骨供養・墓信仰・墓供養等の心的状況によって支えられ、成り立っていた関係であったはずである。しかし、ブラジルにおいては、墓地は公設墓地に置かれ、ブラジルのカトリックの墓観との見かけの類似性によって、日系人の墓信仰は違和感なくブラジル社会に受け入れられ、「フィナードの日」の墓参りとして適応・定着した。その結果、少なくとも墓のない墓信仰を媒介にした寺檀関係は成立しなくなっていたはずである。寺が、プルデンテ地域の日系人地域社会の心的中心たらんとすれば、他の道を求めることになる。「Y 日記」に現れているかぎりでも、寺は、具体的には敬老会、青年会・女子青年会を組織し、結婚式場を準備し、相撲興行を打つ等、広義の地域社会の中心としての機能を果たした。特に勧進相撲は、母国日本の地域社会の文化に根ざした行事として注目される。Y 氏の母村では、かつて村の八幡宮の祭り (9 月) には、村の青年団員 7~8 人が世話をして、浪花節の会をやった。今は、のど自慢大会や耳納 (みのう) 太鼓になったという。その時に包む金一封を「花」といい、個人の有志が贈り、昔はそれを個人宛にしたという。この村の風習は、「Y 日記」の中に書かれた、寺で行われた相撲にも現れている。寺が、広義の地域社会の中心の一つになりうる素地の一つを、ここに読み取ることができようか。

(以下次号)